HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | キリシタン文献における「に」格と「へ」格 : 待遇表現の標識について |
| Author(s) | 白井, 純 |
| Citation | 国語国文研究, 106, 66(1)-49(18) |
| Issue Date | 1997-07-30 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/94770 |
| Type | journal article |
| File Information | kokugokokubunkenkyu_106_66-49.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# キリシタン文献における「に」格と「へ」格
## ―― 待遇表現の標識について ――

白　井　　純

## 1．はじめに

### 1.1．研究の背景

「に」格と「へ」格の問題に入る前に、同じ格助詞の「の」格と「が」格について触れておきたい。

主格或いは属格の「の」格と「が」格は、尊卑関係によって使い分けられていたらしい。待遇表現にかかわるこの問題については、批判説も含めて、中古・中世・近世に渡って多くの研究がなされている。時代、位相によっても異なるが、焦点は、大まかに言って、「の」格は敬意が想定される文脈と中立的な文脈に現れるのに対し、「が」格は親近あるいは侮蔑の文脈にしか用いられない、という点にある。諸説に見るべきは少なくないが、この問題に関しては、「「の」格は尊敬で「が」格は侮蔑である」という理解ではなく、「待遇表現に関して、「の」格は無標であり、「が」格は有標（＋下位待遇）である」という金水敏（1984）の理解が正しいように思う[1]。

本稿は、この待遇表現の標識に注目し、「の」格と「が」格に見られる標識の有無関係が、キリシタン文献では「に」格と「へ」格の関係にも、「に」格は無標、「へ」格は有標（＋上位待遇）として現れることを実証しようとするものである。

最古の用例から殆ど意味の変化が無く、また使用上の制限が少ない「に」格とは異なり、「へ」格は意味の拡大が激しく、それに応じて使用上の制限も時代によって変化している。このような「へ」格の特徴に注目した研究は、「へ」格の起源が名詞であることに関する杉井鈴子（1954）の研究、「へ」格の歴史に関する石垣謙二（1955）の研究が知られている。また、「へ」格がもともと「に」格が分担していた領域を侵食していった事は、青木伶子（1956）他、多くの研究者が認めている。こうした史的変遷以外に地域差もあったことは、ロドリゲスの『日本大文典』や、現代にも残存する方言によっても知られるところである。

本稿が注目する「に」格と「へ」格の使い分けについては、過去に、

1　「に」格は場所、「へ」格は方向を示す場合に用いられる。
2　「へ」格の方が距離を感じさせる。
3　文語では「に」格、口語では「へ」格が用いられる。

等の説明が、既に多くの研究家によってなされている。しかしすべて根拠が曖昧で、一部分の資料では成り立つことでも、全体を説明しうるものではない。

これらの研究と結論は、殆どが場所や方向を上接語にもつ「に」格と「へ」格を対象としている。井上親雄（1991）の研究も、『法華百座聞書抄』を資料として、格助詞に上接する語とかかっていく動詞とが、共に「に」格と「へ」格の使い分けに関係することを指摘したものであるが、使い分けは動詞の移動性に最も強く影響されるとしているように、待遇表現による使い分けとは、直接の関係は無いものと考えられる。

本稿は、これらを視野に入れながらも、場所や方向を指し示す用法から転じて中世に新しく起こった、人物に対して用いた「に」格と「へ」格を対象として、待遇表現の問題を考えるものである。この問題については、「へ」格の上位待遇について論じたものに、蒲原淑子（1991）の研究がある。この研究は動作主と対象との関係に注目したものであり、キリシタン文献にみられた「へ」格の待遇表現について考える上で興味深い研究だが、その要点は、平家物語を中心とする鎌倉期の資料では、動作の受け手尊敬の場合、動作主と対象との身分的関係をもとに、身分の格差が広ければ「へ」格、狭ければ「に」格が用いられたとするものである。しかし、キリシタン文献では動作主と対象を固定しても「に」格と「へ」格が共存することがあり、さらに動作主については影響していないように思われることから、この分析がそのままキリシタン文献に適用できるとは考えていない[2]。

### 1.2. キリシタン文献の「に」格と「へ」格

キリシタン文献に、次のような用例がある（尚、用例の引用に用いた略称については文末の「引用文献について」を参照のこと）。

コンテ 273 P 15　Xecaino tanoximiuo ribetsuru fodo nauo Deusni chicazzuqi tatematcuru nari, mata vagamiuo figuexi fiqiqunaru fodo nauo tacaqu agari, Deusye chicazzuqi tatematcurtu mono nari.
（世界の楽しみを離別するほど尚 Deus に近づき奉るなり、又我が身を卑下し低くなるほど尚高く上がり、Deus へ近づき奉るものなり。）

スピリツアル 037 R 14　Soreyori nochi tcuuamonodomo acaqi irono furuqi ixo<³uo mesaxe tatematcuri, vonco<beniua iguino camuriuo voxicomi, vonteniua taqeuo motaxe tatematcuri, vonmayeni fizamazzuqi, Judeono teivo<ni vonreiuo mo<xi aguru tote, vontenaru taqeuo torite vonguxiuo vchi,...
（それより後つわものども赤き色の古き衣装を召させ奉り、御首には棘の冠を押し込み、御手には竹を持たせ奉り、御前に跪き、Judeo の帝王に御礼を申し上ぐるとて、御手なる竹を取りて御髪を打ち、…）

スピリツアル 038 V 18　Icani tenno teivo<ye mo<xi aguetatematcuru: von-

miuo mixiri mo<sazaru vyeyori cho<chacu xitatematcuru zaininraga guchito, qendonto, mata vareraga togano fo>jato xite...
(いかに天の帝王へ申し上げ奉る：御身を見知り申さざるうえより打擲し奉る罪人らが愚痴と、慳貪と、又我らが科の報謝として…)

スピリツアル365 R 01 Imamade cono govonuo mixiritatematcurazu, Deusyemo mata Anjonimo so<uo>no vonreiuomo mo<xi aguezarixi ayamarino vonyuruxiuo coitatematcuru coto.
(今までこの御恩を見知り奉らず、Deusへも又Anjoにも相応の御礼をも申し上げざりし誤りの御許しを乞い奉ること。)

このようなキリシタン文献の「に」格と「へ」格の使用をみると、動作の対象となる名詞をマークする「に」格は、あらゆる環境下で使われているが、「へ」格は、

① 格助詞にマークされる名詞（対象）が場所や方向である場合。
② 格助詞にマークされる名詞（対象）が神や聖人など、語り手にとって敬意の対象となり得る場合。
③ ②を満たした上で、格助詞がかかっていく動詞が、移動性の動詞、敬意を含む動詞、上位者との関係を表現する動詞の場合。

このうち①か②を満たす場合に使われ、②については、③によって使用率が変化する。

①は、「へ」格の原義としての用法であるが、②のように人的対象[4]に直接「へ」格を用いるのは、鎌倉期に発生する比較的新しい用法である。キリシタン文献では、一部の名詞（対象）と動詞の組み合わせで、「へ」格が「に」格を圧倒するものの、その使用は強制的なものではない。「へ」格の使用は、語り手が読み手にその対象をどう提示するかに依存している。このことは、語り手と読み手のあいだが神聖な存在に対して同一の視点に帰する、特殊な固定関係によって結ばれたキリシタン文献特有の環境を背景としており、文法的条件が直接に関与するものではない。キリシタン文献の「へ」格は、名詞（対象）や動詞の性質によって、何らかの差別化が予想される場合に、それを強める働きをしている。

従って、上記の条件からは、次のような結論が導かれる。

キリシタン文献の人的対象をマークする「へ」格は待遇表現の標識（＋上位待遇）を持つが、「に」格は無標である。

以下には、キリシタン文献のうち、ローマ字版本の、『サントスの御作業』『ヒイデスの導師』『コンテムツスムンヂ』『スピリツアル修行』の4本を中心として上記の結論を実証し、続いて、何故「へ」格に標識が現れたのか考察する。キリシタン文献以

外の文献でもこのことが成り立つかどうかは非常に興味深い問題であるが、文脈に強く依存する助詞の待遇表現を、文脈の異なる性質の文献間で比較証明することは容易でない。これは、今後の課題だと考えている。

## 2．調査

### 2.1．調査の方法

調査は全数調査を前提としたが、②の条件に着目し、そのなかで、③の条件がどう影響するかを考えている。

②の条件については、格助詞にマークされる名詞（対象）を、キリシタン文献の特徴を考慮して、

「神」（Deus、御主、御身、等）
「聖人」（S.Maria、Sancto、Beato、等）
「人間」（「聖人」以外の人間すべて）
「自己」（われ、われら）
「方所」（方向と場所）

に分類し、それ以外を捨象する。人的対象以外に「方所」を加えたのは、人物に対する用法を探る一方で、「へ」格がもともと持っていた場所や方向を指し示す用法も考慮しておきたいからである。

③の条件については、格助詞がかかっていく動詞を、

| | | |
|---|---|---|
| 移動性の動詞 | 敬語動詞 | 「参る」 |
| | 一般動詞 | 「赴く」「近づく」「至る」「行く」 |
| 非移動性の動詞 | 敬語動詞 | 「申し上ぐ」「言上す」「宣う」 |
| | 一般動詞 | 「乞う」「捧ぐ」「頼む[5]」「告ぐ」「与う」「背く」「向う[6]」「対す」「言う」 |

のように選択し分類した。

調査は、格助詞がマークする名詞（対象）と、かかっていく動詞との2つの条件を交差させ、「へ」格の使用がどの条件に最も強く影響されているのかを明らかにすることを目的としている。

### 2.2．調査の結果

#### 2.2.1．調査の結果から分かること

はじめに、「に」格と「へ」格の使用回数をみておく。上から、移動性尊敬動詞、移動性一般動詞、非移動性敬語動詞、非移動性一般動詞の順である（表1参照）。

**表1　キリシタン文献の（に／へ）格の使用状況**

| | 神 | 聖人 | 人間 | 自己 | 方所 |
|---|---|---|---|---|---|
| 参る | 2／7 | 1／4 | 0／1 | 0／0 | 18／12 |
| 赴く | 0／5 | 0／0 | 0／0 | 1／0 | 18／38 |
| 近づく | 11／18 | 5／0 | 3／0 | 4／0 | 16／9 |
| 至る | 5／3 | 0／0 | 6／0 | 1／0 | 45／20 |
| 行く | 0／0 | 0／0 | 7／2 | 0／0 | 22／65 |
| 申し上ぐ | 21／40 | 4／13 | 2／2 | 0／0 | 0／1 |
| 言上す | 9／7 | 2／3 | 0／0 | 0／0 | 0／0 |
| 宣う | 2／0 | 1／2 | 62／3 | 2／0 | 2／0 |
| 乞う | 4／32 | 0／1 | 4／0 | 0／0 | 2／0 |
| 捧ぐ | 41／42 | 2／1 | 3／1 | 5／0 | 3／2 |
| 頼む | 31／12 | 1／1 | 3／0 | 9／0 | 2／0 |
| 告ぐ | 1／0 | 2／3 | 14／1 | 3／0 | 1／0 |
| 与う | 1／0 | 9／1 | 182／0 | 53／0 | 6／0 |
| 向う | 4／2 | 7／1 | 33／2 | 2／0 | 11／3 |
| 対す | 175／10 | 31／1 | 141／0 | 65／0 | 4／0 |
| 言う | 0／0 | 0／0 | 8／0 | 0／0 | 0／0 |
| 敵対す | 2／0 | 1／0 | 0／0 | 6／0 | 1／0 |
| 背く | 1／0 | 2／0 | 1／0 | 2／0 | 0／0 |

（但し、に／へ）

ここには、次のような特徴が現れている。

1　「へ」格は、殆どが「神」「聖人」「方所」だけに用いられる[7]。
2　移動性の動詞については、「に」格と「へ」格が共存する。
3　必ずしも、移動性動詞のみに「へ」格が多いわけではない。
4　同じ非移動性の動詞のなかでも、動詞の性質によって「へ」格の使用率に大きな違いがある。
5　「自己」には、「へ」格を全く用いない。

以下には、個々の動詞と特徴的な用例について分析する。

### 2.2.2. 移動性の動詞

#### 2.2.2.1. 敬語動詞

移動性の敬語動詞として、「参る」について考える。

サントス 164 P 12　S.Joan euangelista cuju<cusai ni xite, xixi tamai, Jesu Christo ye mairi tamo<nari.
(S.Joan euangelista 九十九歳にして、死し給い、Jesu Christo へ参り給うなり。)

サントス 055 P 16　Soreniyotte icanimo yorocobi vomotte von mi ni mairu nari.
(それによって如何にも歓びを以て御身に参るなり。)

ヒイデス 425 P 05　Cono Jesu Christo to mo<xi tatematcuru ua, Deus ye mairu caqefaxi nari to yu<coto uo xiraxite tamauan tameni, Deus sono caqefaxi no vye ni mamiye tamo<nari.
(この Jesu Christo と申し上げ奉るは、Deus へ参る梯なりという事を知らしめ給わんために、Deus その梯の上に見え給うなり。)

サントス 103 S 18　Sareba, S.Aleixo uo itauari mo<xi qeru fito ua midai no Agles ni mairi, mo<xi qeru ua: icani midai sama, cono mivchi ni vocaxerar-etaru finin ua masaxiqu Deus no von fito nite maximasu beqi xisai ni ua: cono fito no vonvye ni samazama no xiruxi arauare tamo<.
(然れば、S.Aleixo をいたわり申しける人は御台の Agles に参り、申しけるは：如何に御台様、この身内に置かせられたる貧人は正しく Deus の御人にて在すべき子細には：この人の御上に様々の験現れ給う。)

人的対象では「神」や「聖人」に対して「へ」格が用いられるが、すべて「へ」格というわけではない。

サントス 291 P 06　Sude ni sono fi teivo<fonzon ni chicaqu mairi tamai, inguin ni faixeraruru toqi, Placido uo bexxite xo<quan xerare, do<no vchi ye yobi tamo<tocoro ni, Placido ua sono mi uo fajime, ninin no go xisocu, von tcuma tomoni do<no vchi ye ua vomoi mo yorazu, cayette vo>qini qirai, sono niuaye itaru coto uo saye fuxo<xigocu nari tote, xirazugauo nite ytamo<nari.
(既にその日帝王本尊に近く参り給い、慇懃に拝せらるる時、Placido を別して賞翫せられ、堂の内へ呼び給うところに、Placido はその身をはじめ、二人の御子息、御妻ともに堂の内へは思いもよらず、却って大きに嫌い、その庭へ至ることをさえ不祥至極なりとて、知らず顔にて居給うなり。)

異教の偶像には、原則として「へ」格を用いない。

サントス 076 S 16　Mata go xinca no vchi yori mo vare yuyeni amata Christan to nari, Jesu Christo uo xinji tatematcuri, vare to tomo ni gloria no tacaqi dairini mairu mono vouocaru bexi to.
(又御臣下のうちよりも我故にあまた Christan となり、Jesu Christo を信じ奉り、我と共に gloria の高き内裏に参るもの多かるべしと。)

サントス 137 P 10　Apostolo no von fenji ni ua: qitaran Domingo ni Ecclesia ni

mairi tamai, Deus no go naixo>ni canai tatematcuru Matrimonio no Sacramento no xisai uo bicuni tachi, sono foca no mono domo ni catari tamauan to no von yacusocu nari. Cocuxi ua xozon ni macaxen to vomouare, vo>qini yorocobaruru nari. Sono fi ni atatte jo<gue banmin Ecclesia ye mairu mono nari.
(Apostolo の御返事には：来らたん Domingo に Ecclesia に参り給い、Deus の御内証に叶い奉る Matrimonio の Sacramento の子細を比丘尼達、その他の者どもに語り給わんとの御約束なり。国司は所存に任せんと思われ、大きに歓ばるるなり。その日にあたって上下万民 Ecclesia へ参るものなり。)

このように、「方所」に関しては共存しながらも、むしろ「に」格が多い[8]。

2.2.2.2. **一般動詞**

移動性の一般動詞として、「赴く」「近づく」「至る」「行く」について考える。

コンテ 012 P 18　Gacumonno fucaqi cotouariuo tazzune saguru yorimo, fericudarite miuo xiru coto ua, nauo Deusye vomomuqi tatematcuru taxicanaru michi nari.
(学問の深き理を尋ね探るよりも、謙りて身を知ることは、尚 Deus へ赴き奉る確かなる道なり。)

サントス 140 P 19　Goqio<dai S.Simon ua Egypto ni von voxiye uo firome tamo<nari. Sono nochi gorio<nin tomoni Persiano cuni ye goqeo>qe no tame ni vomomuqi tamo<nari.
(御兄弟 S.Simon は Egypto に御教えを弘め給うなり。その後御両人共に Persia の国へ御教化のために赴き給うなり。)

サントス 190 P 10　Goxucqe arite yori, rocunen me ni Martyrio uo motome tamauan to no cocoro mochi nite, Siria to yu<Gentio no cuni ni vomomuqi, vo>qinaru xinjin vomotte von dangui xi tamayeba, sono tocoro no xujin von dangui uo cho<mon mo<sare, teinei ni xerare, moto no tocoro ye cayexi mo<saruru nari.
(御出家ありてより、六年目に Martyrio を求め給わんとの心持ちにて、Siria という Gentio の国に赴き、大きなる信心を以て御談義し給えば、その処の主人御談義を聴聞申され、丁寧にせられ、もとの処へ帰し申さるるなり。)

「参る」と同様、「方所」では「に」格と「へ」格が共存する。

サントス 294 P 10　Sonoyuye ua Gentio no fozon uo vogamazaru tote, cono

jennin tachi ni fanafadaxiqi curuximi uo ataye tamo<michi yori go xiqixin uo fanare tamo<yuyeni, sugurete fucaqi curiqi to nari, taitocu uo ye tamo<vomotte, jo<gue banmin no negai nozomu jo<ten no Paraiso ye connichi sumiyacani itari tamayeba ,...
(その故はGentioの本尊を拝まざるとて、この善人たちに甚だしき苦しみを与え給う道より御色身を離れ給う故に、優れて深き功力となり、大徳を得給うを以て、上下万民の願い望む上天のParaisoへ今日速やかに至り給えば、……)

サントス229 S 09　Xicareba fachinin no fitobito ua sucoximo vreo>ru qixocu naqu, cayette yemi uo fucumi, fitai ni Cruz no mon uo tonayete, cubi uo vtare tamayeba, tattoqi Spiritu ua Paraiso ni itari tamo<mono nari.
(然れば八人の人々は少しも憂る気色無く、かえって笑みを含み、額にCruzの文を唱えて、首を打たれ給えば、尊きSpirituはParaisoに至り給うものなり。)

また、『サントスの御作業』に、「知音」に対して「へ」格を用いる例がある。

サントス262 P 10　Daisan ni ua canegane soriacu ni vomoi naxitcuru asaqi chijn ye yuqite, figoro ua safodo fucaqu mo chinamazaredomo, taixet ni vomoitcuru fitobito yori saxi fanasare, nangui ni voyobi qeru yuyeni von mi uo tanomoxiqu vomoite mairiqeru to yixicaba, cano fito yorobobite yiqeru ua.
(第三にはかねがね疎略に思いなしつる浅き知音へ行きて、日頃はさほど深くもちなまざれども、大切に思いつる人々よりさし離され、難儀に及びける故に御身を頼もしく思いて参りけると言いしかば、かの人喜びて言いけるは。)

ここでは、「第三には」とあるように、近接して、二人の「知音」が登場する。

サントス261 P 20　...nangui no vorifuxi vare fitori nite ua mo<xi firaqi gataqereba, co<riocu no tameni mi ni cayete vomo>chijn no moto ye yuqi, do>do<xitaqi yoxi tanomi qereba:
(……難儀の折節我一人にては申し開き難ければ、合力のために身にかえて思う知音の許へ行き、同道したき由頼みければ：)

サントス262 P 03　Mata tcugui no chijn ni yuqite, co<riocu uo tanomu.
(また次の知音に行きて、合力を頼む。)

これは、最も親しい「知音」と次に親しい「知音」に見放された人が、日頃疎略にしていた「知音」に助けられる、という文脈である。連続して、「知音の許へ」「知音に」「知音へ」とあり、その使用に根拠は無いようだが、

サントス 262 P 22　Barlan vo>xe qeru ua. Daiichi no chijn to yu<ua, zaifo>no coto nari: core roxi no aida mi uo tcutcumu beqi nuno yori foca uo atayezu. Daini no chijn to ua: saixi qenzocu no coto nari. Vzzumu beqi ana made qitarite cayeru nari. Daisan ua Fides, Espereanca, Charidade, sonofoca no jenji jenguio<no coto nari. Core sunauachi xisuru toqi saqi ni tachi, Deus no von maye uo mo<xi totonoye, teqi to naru tengu no te uo nogasu to, catari tamo<.
(Barlan 仰せけるは。第一の知音と言うは、財宝のことなり：これ路次の間身を包むべき布より他を与えず。第二の知音とは：妻子眷属のことなり。埋むべき穴まで来たりて帰るなり。第三は Fides, Esperanca, Charidade, その他の善事善行のことなり。これ即ち死する時先に立ち、Deus の御前を申し整え、敵となる天狗の手を逃すと、語り給う。)

のように、そこには比喩的な意味が込められており、それが、第三の「知音へ」につながったと考えられる。「知音の許へ」については、後述[9]のように場所化された表現であり、「へ」格使用の条件に反するものではない。

### 2.2.3. 非移動性の動詞

#### 2.2.3.1. 敬語動詞

非移動性の尊敬動詞として、「申し上ぐ」「言上す」「宣う」について考える。

コンテ 173 P 04　Vareua fai focori naru mi nagara vonarujiye gonjo<xi tatematcuru.
(我は灰埃なる身ながら御主へ言上し奉る。)

ヒイデス 411 P 14　Sore ni yotte, fito ua Deus ni gonjo<xi tatematcuru beqi coto ua: icani von aruji vareraga tameni vonmi ua go meiyo nari.
(それによって、人は Deus に言上し奉るべき事は：如何に御主我らがために御身は御名誉なり。)

スピリツアル 280 R 18　Von aruji Jesu Christo midexitachini notamo<ua: Nangi xecaini voite yuruxitaran mononiua varemo mata tenni voite yurusubexi.
(御主 Jesu Christo 御弟子たちに宣うは：汝世界において許したらん者には我も又天において許すべし。)

このうち、「申し上ぐ」「言上す」は、いわゆる謙譲語であり、「神」や「聖人」を対象として「へ」格がかなり多く用いられている。「人間」を対象にとることが多い尊敬語の「宣う」は殆どが「に」格である。移動性動詞で「へ」格が多いのは、その原義からして当然と思われるが、移動を伴わない「申し上ぐ」のような動詞で「へ」格が

頻繁に用いられたのは興味深い。

『スピリツアル修行』には、「御礼を申し上ぐ」という用法がいくつかある。ここでは、

スピリツアル 346 R 21　...core sunauachi, mino vyeni axiqi coto araba, nauoxi, moxi yoqi coto araba, iyoiyo Deusye vonreiuo mo<xi aguetatematcuranga tame nari.
(これ即ち、身の上に悪しき事あらば、治し、もし良き事あらば、いよいよ Deus へ御礼を申し上げ奉らんがためなり。)

スピリツアル 361 R 24　Coco ni voite cono Virgem no von Anima no xo<jo<qeppacuni maximasu tocoro uo quanqen xi aqiretatematcurite, Deus ye vonrei uo mo<xiague, mataVirgem S.Maria uo iyoiyo fome agametatematcurubexi.
(ここに於いてこの Virgem の御 Anima の清浄潔白にましますところを観見し呆れ奉りて、Deus へ御礼を申し上げ、又 Virgem S.Maria をいよいよ誉め崇め奉るべし。)

等、「神」に対して 11 例がすべて「へ」格を用いているが、

スピリツアル 037 R 14　Soreyori nochi tcuuamonodomo acaqi iro no furuqi ixo<uo mesaxe tatematcuri, vonco<beniua iguino camuriuo voxicomi, vonteniua taqeuo motaxe tatematcuri, vonmayeni fizamazzuqi, Judeono teivo<ni vonreiuo mo<xi aguru tote, vontenaru taqeuo torite vonguxiuo vchi,...
(それより後兵ども赤き色の古き衣装を召させ奉り、御首には棘の冠を押し込み、御手には竹を持たせ奉り、御前に跪き、Judeo の帝王に御礼を申し上ぐるとて、御手なる竹を取りて御髪を打ち、……)

のように、兵士がイエスをあざけって言う場合に「に」格が用いられるなど、一様に「へ」格を使うのではなく、状況によって使い分けていたことが分かる。また、その他の動詞の用例からも、「神」に対する場合には「へ」格、「人間」に対する場合には「に」格と、ここでは明確な使い分けがあることが認められる。

2.2.3.2. **一般動詞**

ここでは、非移動性の一般動詞として、「乞う」「捧ぐ」「焼香す」「告ぐ」「与う」「背く」「向う」「対す」「言う」について考える。

スピリツアル 285 R 25　...von aruji Jesu Christo Somana Sanctano Quinta Feriano yo bansui no jibunni midexini notamo<ua: Vaga nauo motte nangira Deus

Padreye coitatematcuru fodono cotouo atayetamo<bexi:
(御主 Jesu Christo Somana Sancta の Quinta Feria の夜晩炊の時分に御弟子に宣うは：我が名を以て汝ら Deus Padre へ乞い奉る程の事を与え給うべし：)

サントス 063 S 03　Cono nhonin cono sainan ni yotte, sumannin no fito Idolos no toga ni xizzumi, tengu ni sono curaiuo sasaguru coto uo coraye tamauazu xite,...
(この女人この災難によって、数万人の人 Idolos の科に沈み、天狗にその位を捧ぐることを堪え給わずして、……)

サントス 082 P 08　Xiranu ga yuyeni, cacunogotoqu xiqereba, nangi yomigayeru yo<ni vaga Deus ye Oratio uo sasague tatematcuru nari.
(知らぬが故に、かくのごとくしければ、汝蘇るように我が Deus へ Oratio を捧げ奉るなり。)

サントス 249 S 16　Core von aruji ye taixi tatematcurite ua daichu<co>, vare ni taixite ua co<co<tarubexi.
(これ御主へ対し奉りては大忠孝、我に対しては孝行たるべし。)

ヒイデス 076 P 20　Cono do<ri ni yotte Theologo tachi no iyeru gotoqu, facari mo maximasanu go quo<dai no Deus ni somuqi tatematcuru tcumi toga ua facari naqi toga nari to iyeri.
(この道理によって Theologo たちの言える如く、はかりもましまさぬ御広大の Deus に背き奉る罪科ははかりなき科なりと言えり。)

このうち、「神」を対象にすることが多い「乞う」「捧ぐ」で「へ」格が多く、「人間」を対象にする「告ぐ」「与う」では殆ど「に」格だけが用いられる。また、対象に「神」も「人間」も等しくとり得る中立的な「対す」で、「へ」格が常に尊敬補助動詞「奉る」を伴いながら現れたのは、これまでみてきた傾向に反するものではない。
「焼香（す）」のなかに、異教の偶像に対して「へ」格を用いた例がある。偶像に「へ」格を用いた例があるのは、本稿の主張に反するようだが、

ヒイデス 282 P 09　S.Basilio S.Barlam no Martyrio uo xiruxite notamauaqu: buxi domo cono Martyr uo nasaqenaqu cho<chacu xi tatematcurite, facaricoto uo meguraxite cono Sancto ni Idolos ye xo>co<saxe tatematcuran to suru mono nari.
(S.Basilio S.Barlam の Martyrio を記して宣わく：武士ども Martyr を情けなく打擲し奉りて、はかりことをめぐらしてこの Sancto に Idolos へ焼香させ奉らんとするものなり。)

サントス 137 S 23　Mata Eugenia ye ua: Roma no fozon ye xo>co<suru mono ca, ygui arabatachidocoro ni corosaruru ca, futatcu ni fitotcu uo conome to no xenji no von tcucai tatcu.
（また Eugenia へは：Roma の本尊へ焼香するものか、異議あらばたちどころに殺さるるか、二つに一つを好めとの宣旨の御使い立つ。）

のように、どちらも、偶像を崇拝する者がいて、偶像崇拝を強制している文脈なので、ここに用いられた「へ」格は偶像崇拝者からの待遇表現であり、語り手からのそれではないと考えられる。

同じように、皇帝など世俗的な権力者を示すばあい、通常は「に」格であるが、

サントス 267 S 04　Cono xugo Sancto ua Jesu Christo no von tcucayebito nite maximasu coto uo qiqeba, vo>qini azaqeri, Cesar teiuo<ye tcucaye tamate to susume mo<xeba, Sancto cotayete notamauaqu: negauacuua von mi mo, teiuo<mo muyacu naru Idolos no vyamai uo yamerare, vonaruji Jesu Christo uo vyamai tamo<beqi coto canyo>nari to.
（この守護 Sancto は Jesu Christo の御仕え人にてまします事を聞けば、大きに嘲り、Cesar 帝王へ仕え給えとすすめ申せば、Sancto 答えて宣わく：願わくは御身も、帝王も無益なる Idolos の敬いを止められ、御主 Jesu Christo を敬い給うべき事肝要なりと。）

も、皇帝の臣下としての立場を表現したものだと考えられる。

### 2.3. 考察

#### 2.3.1. 問題の所在

これまでにみてきたように、キリシタン文献の「へ」格は、

① 格助詞にマークされる名詞（対象）が場所や方向である場合。
② 格助詞にマークされる名詞（対象）が神や聖人など、語り手にとって敬意の対象となり得る場合。
③ ②のなかで、格助詞がかかっていく動詞が、移動性の動詞、敬意や上位者との関係を表現する動詞の場合。

このうちの、①か②を満たす場合に用いられ、②については、③によって使用率が変化する。そして、このことは文法的な制約と直接は関係していない。「対す」のような中立的な動詞でも、②の条件下では「へ」格が少数ではあるが用いられた事、対象を上位者として扱う動詞では敬語動詞以外でも「へ」格の使用率が高い事から考えて、キリシタン文献の「へ」格に待遇表現の標識があり、語り手が「へ」格の移動性という原義を離れて積極的に活用していたことが確認できる。

しかし、「へ」格は移動性を表すのが原義だとしたら、「参る」「行く」「近づく」等で、「方所」を表すために何故もっと多くの「へ」格が使われなかったのだろうか。また、これまでの「移動性動詞における「へ」格の増加」という説明[10]では、キリシタン文献の「へ」格の分布を説明できないように思われる。

ここで、移動性動詞について、他資料と比較しておく（表2表3参照）[11]。

本稿が調査したキリシタン文献の「へ」格の使用率は、特に場所（「方所」）において、『天草本平家物語』の使用率とは異なり、むしろ『延慶本平家物語』に近い。同時代の資料と比較すると、「に」格の使用が際立つ結果になっている。

### 2.3.2. 移動性の尊敬動詞から一般動詞へ

「へ」格は「方所」でなければ殆どが「神」か「聖人」に対して用いられる。しかし、「人間」に対して若干ではあるが「へ」格を用いたものがある。これらの中には、「聖人」に準ずる性質をもった対象に「へ」格を用いた例もあるが、『スピリツアル修行』のように、聖人ではない「ピラト」に対して「へ」格を用いた例もある。

スピリツアル 169 R 19　Sarufodoni Sacerdotes no tcucasa, Scriba xeiuo idaxite vttayeqereba: Herodesuo fajimeto xite igueno fitobito sague iyaximetatematcuri, fateniua anadorimo<su tameni xiroqi ixo<uo qixemairaxe, mata Pilatosye fiqicayexitatematcuru nari.
（さるほどに Sacerdotes の司、Scriba 精を出して訴えければ：Herodes をはじめとして以下の人々下げ卑しめ奉り、果てには侮り申すために白き衣裳を着せ参らせ、又 Pilatos へ引き返し奉るなり。）

類似の例は他に4例あり、むしろ「ピラト」に対して「に」格を用いたものが1例しかないことを考えると、本稿の主張に反する例のようにみえる。しかし、この用例

**表2　場所（「方所」）での「に／へ」格の使用状況**

| | 延慶平家 | 甲陽軍鑑 | 虎明狂言 | 狂言記 | 天草平家 | キリシタン |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 参　る | 33／96 | 0／98 | 4／235 | 3／101 | 7／56 | 18／12 |
| 赴　く | 6／30 | 0／4 | 3／4 | 0／1 | 2／9 | 18／38 |
| 行　く | 28／49 | 0／56 | 4／115 | 1／80 | 0／10 | 22／65 |

**表3　人的対象での「に／へ」格の使用状況**

| | 延慶平家 | 甲陽軍鑑 | 虎明狂言 | 狂言記 | 天草平家 | キリシタン |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 参　る | 12／14 | 0／24 | 0／8 | 2／5 | 1／5 | 4／12 |
| 赴　く | 0／0 | 0／0 | 0／0 | 0／0 | 0／0 | 0／5 |
| 行　く | 0／0 | 0／0 | 0／2 | 0／5 | 0／0 | 8／2 |

（但し　に／へ）

の前後をみると、

スピリツアル 172 R 06　Sonotoqi Pilatos Nazarethno JESUS, Judeono teivo<narito, Hebraica, Greca, Latina cono misamano jiuo motte itani caqitcuqe, JESUS no von Cruzno vyeni vchitcuqeraruru nari. Sareba moromorono Sacerdotes Pilatosno motoni yuqite teivo<to caqitamo<becarazu, sonomi Judeono teivo<to iuareqeruto caqitamayeto mo<xiqereba:
(その時 Pilatos　Nazareth の JESUS,　Judeo の帝王なりと、Hebraica,　Greca, Latina この三様の字を以て板に書き付け、JESUS の御 Cruz の上に打ち付けらるるなり。されば諸々の Sacerdotes Pilatos の許に行きて帝王と書き給うべからず、その身 Judeo の帝王と言われけると書き給えと申しければ：)

のように、「ピラトの許（もと）」に「へ」格を用いた例が 5 例あり、「に」格を用いた 1 例よりも多い。「ピラト」に「へ」格を用いた例は、前後にある「ピラトの許」に「へ」格を用いた例から派生したものであると考えることは不可能でない。実際、キリシタン文献では、

サントス 071 P 01　...banmin Jesu Christo uo macotono Christo narito xinzubeqi mono narito nagueqi, ixxo ni atcumari fio<gio<uo naxite, Santiago no moto ni mairite mo<saqu.
(万民 Jesu Christo を誠の Christo なりと信ずべきものなりと嘆き、一所に集まり評定をなして、Santiago の許に参りて申さく。)

スピリツアル 258 V 18　Mata feiyu<saxetamaite nochi, gofattono Sacrificiouo sasaguen tameni, mazzu Sacerdoteno tocoroye yuqeto guegi xitamo<cotouo miyo.
(又平愈させ給いて後、御法度の Sacrificio を捧げんために、まず Sacerdotes の所へ行けと下知し給うことを見よ。)

スピリツアル 130 V 10　...sudeni careraga qegaretaru teuomotte guiocutaiuo itaximetatematcuri, saixo mazzu Anasga mayeye fiqimuqetatematcuru coto.
(既に彼らが汚れたる手を以て玉体を痛しめ奉り、最初まず Anas が前へ引き向け奉ること。)

のように、「の許」、「の所」、「の前」など、場所を指し示すことで間接的に人的対象を表す場合が多く、その場合、間接的に表される人的対象は、次のように、直接には「へ」格をとり得ないものが「へ」格をとる例もある。

サントス 137 S 21　Sonoyuye ua: Basilla Pompeio no von tcuma to sadamerar-

exi ga ima ua Christan nari tote, fu<fu ni naru majiqi yoxi aru to so>mon xiqereba, micado qicoximesare te, gogueqirin fanafadaxu<xite, Basilla ye chocuxi uo tate tamai, isogui votto no moto ye yuqu bexi: sa naqini voiteua, sunauachi agui uo fanasareyo tono chocuguo<nari.
(その故は、Basilla Pompeio の御妻と定められしが今は Christan なりとて、夫婦になるまじき由あると奏聞しければ、帝聞こしめされて、御逆鱗甚だしうして、Basilla へ勅使を立て給い、急ぎ夫の許へ行くべし：さ無きにおいては、即ち顎を放されよとの勅状なり。)

サントス 155 S 06　Sono toqi Lourenco iza saraba yucan, faya Gloria no camuri uo totonoyeraretari tote, Valeriano ga moto ye tcuqi tamayeba, Ecclesia no zaifo>uo isogui vatasareyo to mo<seba. S.Lourenco xigonichi noberaruru ni voiteua, cono tocoro ni tazzusaye qitaru bexi to notamo<ni, Valeriano mo do>xin xi, Hippolyto mo vqecacarite cayeru mono nari.
(その時 Lourenco いざさらば行かん、はや Gloria の冠を整えたりとて、Valeriano が許へ着き給へば、Ecclesia の財宝を急ぎ渡されよと申せば。S.Lourenco 四五日延べらるるにおいては、この所に携え来るべしと宣うに、Valeriano も同心し、Hippolyto もうけかかりて帰るものなり。)

サントス 137 S 21 の「Basilla へ」も、本来「Basilla の許へ」とあるべきものか。「夫」や「Valeriano」も、単独では「へ」格を用いない名詞（対象）である。このように考えてくると、移動性の尊敬動詞に多い「の許」等の用法から、同じく「の許」等をとり易い一般動詞について「へ」格を用いるようになり、やがて直接に人的対象をマークする「へ」格が生じたと考えるのは不自然でないように思われる[12]。

しかし、まず移動性動詞であり、しかも敬語動詞でもある「参る」で、「へ」格が「に」格を圧倒しなかったのはどのような理由によるものだろうか。また、移動性動詞で全般的に「へ」格の使用率が控えめなのは何故だろうか。

ロドリゲスの『日本大文典』は、「に」格や「へ」格について、次のように分析している（引用には土井忠生の邦訳本を用いた）。

P.407　副詞の Idzucuye, 又は、donataye, を用いて問う場合、即ち、ある場所へ向かっての移動に就いて話す場合には、向かって行く方向とか行き着く場所とかを示す語が助辞 Ye を伴う対格に置かれる。例えば、Miyacoye　noboru.　Saicocuye cudaru.

助辞 Ni は書きことばに於いて往々 Ye の代わりに用いられる。

この問いに関して日本の諸地方で色々な助辞を使う事は注意しなければならない。都では助辞 Ye を用いるが、これが正しいのであって、すべての言い方のうちで勝っている。下では大部分の地方で Ni を用い、関東では助辞 Sa を用いる。それ故一つの諺、即ち、ある言い種が日本には行われている。それは次のように言う。

Quio＜ye, Tcucuxini, Quanto＞, l, bando＞sa.（京へ、筑紫に、関東、又は、板東さ。諺。）

その意味は、都では助辞 Ye を、下では Ni を、関東では Sa を使うというのである。直ぐ次に示すように、諸地方に色々な助辞があるけれども、常に都に於けると同じく Ye を用いるのがよい。それが正しく且上品だからである。

待遇表現については全く触れられていないが、特に場所に関しては「へ」格を使うべきだとしている。しかし、「に」格についても、「書き言葉（escritura）」においては使われるとして、完全に「へ」格偏重ではない。また別の箇所では人的対象をマークする「与格（dativo）」をこれと同様に扱っており、場所と人的対象の間に用法上の差別をみていない。本稿が調査したキリシタン文献は、こうした理解とは別に、格助詞がマークする対象（名詞）に注目していたのではないだろうか。

もともと移動性の動詞は、人的対象を場所として表現することによって、人的対象に対する「へ」格の使用を可能にしてきた。初期においては、その人的対象は多くの場合、「御前」「御方」など、同時に敬意の対象ともなった筈である。その結果、もともと人的対象にも用いられていた「に」格とは異なる特殊な表現として、「へ」格は移動性動詞の枠内で、限定された人的対象とのみ結びついたものであろう。移動性の動詞において人的対象に「へ」格が多く用いられるのはそれを裏付けている。キリシタン文献では、むしろ移動性ということよりも、人的対象の性質そのものを重視する傾向があるのではないだろうか。そのため、移動性動詞よりも、移動性の尊敬動詞をとり得る名詞（対象）と、その名詞（対象）を上位者として位置づけるいくつかの一般動詞に、より強い「へ」格使用の傾向が現れたのである。キリシタン文献は軽い尊敬の対象となる人物を「に」格で表現することによって、神や聖人に対する「へ」格使用を際立たせる効果を獲得している。これは、「へ」格が「に」格を圧倒する狂言などには見られない効果である。

## 3．おわりに

上述の結果は、「へ」格がマークする名詞（対象）が、場所や方向から人的対象へ拡大する過程で、もともとあった「に」格とは違って待遇表現の標識が生じた結果だと考えられる。仮に、当代では場所や方向を「へ」格でマークすることが一般的であったとしても、それを人的対象に用いるためだけに、すでに「に」格が問題無く担っている領域を剝奪するとは考えにくい。「へ」が人的対象へと領域を拡大させるときに、新しい意味の付与があり、その結果、場所や方向以外をマークする場合に、「に」格は無標、「へ」格は有標（＋上位待遇）として共存したものと考えられる。

本稿は、「へ」格の待遇表現の標識について、キリシタン文献に限定して考察した。その過程で、キリシタン文献の「へ」格の分布は、過去の研究によって予測されたものと多少のずれがあることが確認できた。そのずれは、「へ」格の待遇表現の標識の存在を主張する一つの根拠である。一般に理解されているように、「へ」格が当代の資料

に増加傾向のある、新しい用法なのであれば、それに待遇表現の標識がある事と、ロドリゲスが主張する「へ」格推薦とは、どのように関わるのだろうか。

今後、検討すべき課題は多い。

## 注

1 但し、近藤泰弘（1980）によれば、訓点資料ではこの関係が成り立たないとも言われ、安易な結論は控えなければならない。

2 スピリツアル修行 132 V 19 Von aruji vaga cuniua cono xecaini arazuto, Pilatosye notamo＜micotobauo motte macotono tenchino von aruji teivo＜nite maximaxi nagara, xecainite miyouo tamochitamo, beqi tameniua arazu,...
（御主我が国はこの世界にあらずと、Pilatos へ宣う御言葉を以て真の天地の御主帝王にて在しながら、世界にて御代を保ち給うべきためにはあらず、……）
等のように、上下関係が逆転しても「へ」格が用いられる場合がある。

3 便宜的に、開音符を o＜、合音符を o＞とする。以下同じ。

4 本稿では、「人間」の他、「神」や「聖人」なども指す。

5 「頼む」の他、「頼みを掛く」も含めた。

6 「向う」は、移動を伴う場合もあるが、対象としたキリシタン文献には、こうした用例は僅少であると思われる。

7 「人間」に対しても若干数が「へ」格を用いるが、その対象は殆どが聖人に次ぐものとして軽い敬意を伴う対象である。

8 後述のように、「参る」のような移動動詞で「に」格が頻繁に用いられるのは、当代の他の文献に比べるとむしろ異例である。

9 2.3.2 を参照。

10 青木伶子（1952）は、キリシタン文献の資料として『天草本平家物語』を使用して「へ」格の使用率を計っている。氏はこれを資料として、移動性動詞では当代に「へ」格が「に」格を圧倒した旨を述べておられるが、本稿が用いた宗教書では、これまでみてきたように、移動性動詞だからといって「へ」格ばかりが用いられたわけではない。

11 十分な用例がない動詞は省略した。

12 『延慶本平家物語』には、こうした用例が豊富にみられる。

## 引用文献について

用例の引用に用いた文献について、「コンテ」は『コンテムツスムンヂ』、「スピリツアル」は『スピリツアル修行』、「サントス」は『サントスの御作業』、「ヒイデス」は『ヒイデスの導師』である。すべてローマ字版本を用いた。尚、引用箇所の略称にある「P」は頁数を示すが、『サントスの御作業』については、「P」を第1巻、「S」を第2巻の略称として、『スピリツアル修行』については、「R」を表、「V」を裏の略称として用いている。

## 参考文献

青木伶子（1952）「奈良時代における連体助詞『ガ』『ノ』の差異について」（『国語と国文学』 第29巻第7号）

山崎久之（1953）「助詞『の』『が』の表現的価値── 尊卑説批判 ──」（『群馬大学紀要』2）

寿岳章子（1958）「室町時代の『の・が』―その感情価値表現を中心に―」（『国語国文』第27巻第7号）

近藤泰弘（1980）「高山寺蔵史記殷本紀・周本紀の訓点における『の』『が』の用法」（『高山寺古訓点資料　第一』（高山寺資料叢書第九冊）東大出版会）

近藤泰弘（1986）「敬語の一特質」（『築島裕還暦記念国語学論集』明治書院）

湯沢幸吉郎（1955）『室町時代言語の研究』風間書房

湯沢幸吉郎（1955）『徳川時代言語の研究』風間書房

山崎久之（1963）『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院

青木伶子（1952）「「へ」と「に」の消長」（『国語と国文学』第24巻）

石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』岩波書店

金水敏（1984）「てにをはの敬語法」（『研究資料日本文法⑨敬語法編』明治書院）

井上親雄（1991）「法華百座聞書抄における助詞」──「へ」と「に」の用い方 ──」（『鎌倉時代語研究14』武蔵野書院）

蒲原淑子（1991）「格助詞「へ」と「に」の消長についての一考察 ──「平家物語」を中心として ──」（国語学会発表要旨　『国語学』166）

付記：本稿は、平成八年度北海道大学国語国文学会秋期大会の発表をもとに作成したものである。

（しらい　じゅん・北大大学院修士課程）